

國史によせる心

附屬幼稚園 志村貞子

昭和六年九月十八日、柳條溝に端を發した滿洲事變以來、早くも十年を経過し、本日は恰かもその十周年記念日にあたる。當時、小學生であつた自分が十九日登校してから號外によりその事を知り、心に受けた「おもひ」は、子供ながらも非常に烈しいもので、あの號外の鈴の音と共に深く腦裡に灼きつけられてゐる。

その後、機會を得て、建國以來輝かしい發展を遂げつゝある滿洲國を訪れ、幾多英靈の眠る戰跡に立つた折にも、小學生時代に迎へたこの日の「おもひ」を新たにしたことであつたが、今日、十周年記念日を迎へるにあたり、その「おもひ」は一しほ深いものがある。この「おもひ」は、當時小學生であつた自分なりに自覺した愛國心であり、その後、次第に啓培せられた國家意識であり、更にいへば皇國民としての自覺及びそれに伴ふ責任感に他ならない。事實、滿洲事變を契機として我々國民の間に國家意識の切實なる覺醒を見るに至つたことは、我々が既に自ら體驗して來たところである。しかも、日支事變、第二次歐洲戰爭、皇國

の興廢を賭する一大非常時局に直面した今日に於ては、國民各自が皇國民としての自己に目覺め、強固なる國家意識、國民的自覺の下に一致團結して事に處することは更に一層緊要事であるといはねばならぬ。

國民としての自覺を振起することは種々の方面から、種々の方法により行はれ得るであらうが、就中、國史への回顧はその最も根本的なるものであると思ふ。既に近年國史の研究が盛に行はれ、我々國民の國史への關心が深められ、高められつゝあることは、皇國今後の逞しき發展への一階梯、眞に國家の爲よろこばしき限りである。

我國家の歴史は、一言にしていへば、皇室を中心として肇國以來進歩、發展せる我國民の繁榮の歴史であるといへよう。この、皇室を中心とする國家意識を以て貫かれてゐるところこそ、實に世界各國の歴史に無比なる所以なのである。この一貫せる國家意識の根柢は、「大日本は神國なり」の信念である。肇國以來易らざる、國民の國家に對する根本認識である。

我國史はこの信念の顯現せるものに他ならない。細かく觀ずれば、國史上に各時代があり、その各時代の特色があり、且時代により皇國精神に多少の消長があるにせよ、この根本精神は、さうした事象の流れの上に超然として萬世易らぶ繼續して來たのである。かゝる國家に對する根本認識は一の信念として、我國民の一人々々が體得してゐるべき筈のものであるが、就中次代の日本——申すまでもなく現代との聯關は極めて密接である——を擔ふ少國民の心に、我國體に對する敬虔なる心、國史への尊敬、皇國使命の自覺——皇國民としての自己に課せられた重大責務の自覺——を啓培することの必要が痛感せられてゐる。その結果、學齡前の日本の國民の教育といふ重要な役目を擔ふ幼稚園に於ても、このことにつき、またその方法につき、既に種々の方面から研究され、論議されてゐるやうである。その中で私が最も大なる關心を持つものは所謂國史ばなしについての研究である。日本の少國民としての幼兒に我皇國の歴史を如何に語りきかせ、如何に感じさせらるかは極めて重要な問題である。

既におはなしとして具體的な形をまつて發表せられたものも多くあるやうであるがそれらについて、こゝに批判を加へる資格は私にはない。たゞ眼に觸れた一部のものについていへば、「中心」への結び付きに於て缺けるものがあり

はしないかを怖れる。例へば、古典による國史回顧の重要性から、我國古典中の古典もいふべき古事記を、幼兒にきかせる話として採り上げたものにしても、古事記をこりあげるさいふ考へ方には誠に同感であるが、逐語的に單に言葉をやさしく幼兒向に書き改めただけのもの、神様の御名を一々覺えさせるさいふあまりに形式的、末梢的に走つたもの等、未だ相當考慮の餘地がありさうである。幼兒にきかせる話としては、自ら古事記の中のある話だけが選ばれねばならないであらうし、しかも、それがばら／＼の話としてでなく、「中心」への結び付きに於て共通なるものをも有する筈である。また國史上の人物、古來、英雄といはれ、偉人といはれる人々の「はなし」にしても、天皇に對し奉る忠義の精神、我國家に對する功績に於いて、その人物を把握すべきで、單なる興味本位の個人的武勇談の如きは、極めて價値のないものといはねばならぬ。

而して正しき國史ばなしとは、これを作るもの及び語る者の、神に對する尊敬の念、我國史の正しき認識を國史に對する感激によつて生れたものでなければならぬ。かゝればそれは、自ら幼兒の心に反映し、皇國民としての幼兒の心を培ふものと思ふ。要は、保育者その人の、國史によせる心であり、信念である。保育者その人の精神如何にあると思ふ。